

## 史料 2

## 東京官園

## 秋庭鉄之

U. S. Treat の概要は前号に掲載したが、その頃、明治 11 年には単に同氏が借楽園で試験を行つただけではなく、東京と七重（函館近郊、現在の七飯）でも行われた。しかし、全国的にみれば、醒井孵化場が設置され、三面川にも人工孵化が行われたから、特に本道が革新的だつたというわけではなかつた。勿論、独、伊、仏、米等の先連国は既にまつたく軌道に乗つている頃でもあつた。しかし、本道としては全く初期の頃の試験であつて、その規模からいつても画期的な試みであつた。ただその規模の大きさの割にはお互の試験の関係、その後のすすめ方については記録に明らかでない。いわば非常に特質的に史上には見出されているものである。

東京官園の設置は非常に古い。

明治 4 年に開拓使東京出張所が設けられたが、11 月「米国ヨリ購入セシ動植物諸種ヲ北海道全道ニ移サントスルニ因リ氣候ノ差異繁殖ノ如何ヲ察スルタメ」に農業課を設け官園（試験場）を開いている。これが東京官園で、次の 3ヶ所に設けられた。

1号官園 青山南町7丁目1  
36,286 坪（植物）

2号官園 青山北町7丁目1

53,600 坪（植物）

3号官園 麻布新筈町5

76,407 坪（動物）

実に東京の中心部に 16 万坪以上の面積を北海道のために試験地としてとつたものであり、いかに当時の本道開拓が政治的に大きく扱われていたかがわかる。

## 東京官園における試験

以下はこの記録がもつとも詳細に報告されている「開拓使事業報告」による。（同書第 3 篇物産、581 頁～586 頁迄転載）

8 月東京第 3 号試験場内養魚池ニ於テ鱒鮭卵人工孵化ヲ行ヒシニ鮭 14 尾 45 寸許ニ成長セシヲ以テ神奈川県下丸子駅ニ沿ヒタル玉川ノ下流（六郷川 2 里許上流ノ間）ニ放流シ其繁殖ヲ試験ス因テ東京府神奈川県ニ囑シ漁業者ニ該魚ヲ捕獲スルヲ禁ス。

左ニ移養ノ梗概ヲ記ス。

11 年 11 月 12 日札幌郡琴似、千歳郡漁 2 川ニテ獲ル所ノ鱒卵 5 千顆<sup>(註1)</sup>（琴似川 43 50 顆、漁川 650 顆）<sup>(註2)</sup> 玄武丸ニテ本場ニ回致ス因テ直ニ外匣ヲ発キ内匣ヲ其儘水中ニ浸ス事凡 1 時 30 分 白布ニ附着セル卵子ノ離ルルヲ度トシ水苔ヲ去リ卵子ヲ検スルニ運搬ノ期後レタルカ或ハ俄ニ暖気

ニ変シタルノ故カ船中ニ於テ孵化シ或ハ白斑点ヲ卵面ニ顯シ又満面白色ニ変シ腐敗シタル者4分ノ1ニ及ヘリ因テ之ヲ除去シ其生意アル者ヲ孵化匣ニ移シテ水槽ニ浸シ日々点検スル事数10回敗卵塵埃等ノ汚物アレハ直ニ護謨製茄子形ノ吸收器ヲ以テ採取シ極テ清潔ニシ水流ノ緩急宜ヲ得セシム着後2週日間ニシテ悉ク孵化セリ其孵化ノ期ニ至レハ卵内円形ノ魚形ヲ頭ハシ卵ヲ破リ頭部ヲ出シヤ忽チ脱殻シ腹部ニ赤色卵狀物ヲ附着シ遊泳ス其卵狀物ハ魚ノ成育ニ從ヒ漸次分離ス發生ハ先ツ頭部ヲ出スヲ順トスレトモ尾ヨリスルモノ亦少カラス或ハ仔魚アリ或ハ螺旋狀ノ魚アリ或ハ頭部ヲ出セル儘ニテ死スルモノアリ其孵化ノ魚兒ハ微白色ニシテ漸々頭部ヨリ茶褐色ニ變シ或ハ黒斑ヲ点ス餌ヲ与ルハ腹部ノ赤色卵狀物ノ離ルヲ度トス發生ヨリ凡6週日ニ及テ煮熟ノ卵黃少量ヲ与ヘ試ルニ好シテ能ク食セリ其中孱弱ノ魚兒ハ腹部ノ卵狀物分離速カナラ次第ニ腹部膨脹シ白斑点ヲ顯ハシ病死スルモノ陸続絶ヘス1月百ヲ以テ数フルニ至ル6週日間毎週敗卵死魚ノ数左表ノ如シ。

週	琴似川産		漁川産			
	原	数	敗卵死魚	原	数	敗卵死魚
1	4,326	1,806	650	81		
2	2,520	351	569	41		
3	2,169	62	528	13		
4	2,107	97	513	25		
5	2,010	785	490	142		
6	1,225	561	348	25		
差引計	664	3,662	323	327		

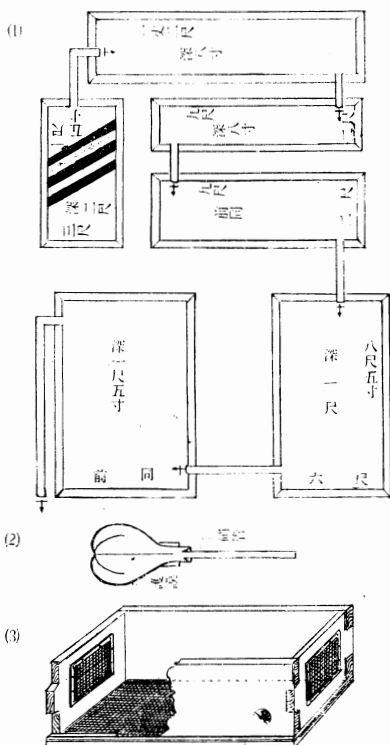
此時勸農局病魚治療法ニ抛リ泥水ニ食塩少量ヲ和シ之ヲ小器ニ盛リ病魚ヲ放

チ須臾ニシテ出シ清水ニ放ツモ絶テ其効ヲ見ス蓋シ交接宜ヲ得ス卵子ノ勢力不充分ナルト事創始ニ係ルヲ以テ器械構造其他水槽ニ架スル鉄管塗株ノ「コールタール」臭気甚キカ故ニ或ハ幾分カ水中ニ混セシ等ノ害タルモ知ル可ラス囊ニ勸農局四ツ谷試験場ニ於テ米国購入ノ魚卵孵化ノトキ同症ニ罹リ死魚甚多カリシト云又聞ク養魚水ハ華氏40度(4.4°C)ヨリ54.5度(12.5°C)ニ非レハ不可ナリト然ルニ孵化室内ノ水温62度(16.7°C)養魚池ノ水温42度(5.6°C)ナルニ由リ其水温ノ適セサリシヲ慮リ更ニ50尾ヲ23ノ孵化匣ニ入レ養魚池ニ浸入シ試ルニ著キ効驗ヲ見ス偶養魚池中23尾ノ鱒魚ヲ見タリ其勢活潑ニシテ室内鱒魚ノ比ニ非ス是孵化室ヨリ脱出シテ此広濶ノ池中ニ游泳スルヲ以テナリ是ヲ以テ未タ放養ノ期ニ至ラサルモ300尾ヲ存シ余ハ悉ク池中ニ放チシニ成長ノ状ヲ呈セリ然ルニ室内ノ魚兒300尾ハ本年1月8日迄ニ悉ク死シ池中ノ魚兒ハ7月2日ニ至リ華氏84度(23.9°C)ノ炎熱ノ為メ死スル者甚多ク其存スル者僅ニ50尾ニ過ス其最長セルモノ6寸余ニ及ヘリ因テ苦筈等ヲ用テ日光ヲ遮蔽セシニ水温63度(17.2°C)ニ降り死ヲ免ルヲ得タルモ8月ニ及テ炎熱日ニ増シ水量日ニ減シ23日ニ至リ1分時間2升ヲ減ス此時ニ至テ魚兒水面ニ浮ヒ餌ヲ与ルモ食セス終ニ死セリ。

本年2月石狩川産<sup>(註3)</sup>鮭卵9000顆ヲ本場ニ於テ人工孵化ス其方法畧ホ鱒魚ニ同シ但シ鱒ハ初困難ニシテ後易ク鮭ハ之ニ反ス7月2日鮭兒4寸許ニ長セシニ華氏84度(23.9°C)ノ炎熱ニ遇ヒ死スル者多シ然レトモ鱒魚ニ比スレハ好結果ニシテ其大ナル者45寸許ニ長スルヲ以テ8月

21日1000尾ヲ丸子駅玉川下流ニ放テリ。

孵化室ハ（間口4間奥行3間）地ヲ堀ル事3尺余焼杉板ヲ以テ囲ヒ上屋ヲ設ケ板羽目ヲ周ラシ窓ヲ4方ニ開キ正面中央ヲ入口トシテ3尺ノ開戸ヲ附シ水槽ヲ設ケ孵化匣ヲ其内ニ排置ス水槽ハ内面ヲ焼焦シタル松板ヲ用イテ作ル第1槽中斜ニ3行ノ溝ヲ穿チ之ニ「フラ子ル」ヲ張りタル障子3枚ヲ嵌メ以テ水流ノ塵埃ヲ濾過ス室後ノ山腹ニ溜井ヲ穿チ樋ヲ伏セテ水ヲ槽中ニ引キ每槽順次環流セシム又別ニ甲槽ヨリ鉄管ヲ各層上ニ架シ其管ニ数小孔ヲ穿チ各槽水量不十分ナルトキハ栓ヲ抜キ管水ヲ適宜ニ注入ス又各槽剩ス所ノ水ハ樋ニ受ケ室外ノ養魚池ニ注下ス養魚池ハ孵化室南傍ノ低地ニ設ク広凡70坪深5尺池中ヲ4区ニ別チ各種類ヲ分チ育養ス然ルニ水量甚少ク多数ノ魚兒ヲ養フニ足ラス凡ソ池水ハ清冷且ツ多量ニシテ流通宜キヲ要ス然ラサレハ夏日水温昇騰シ為メニ病ヲ醸シ死ニ至ラシムルノ憂アリ。



松板を以つて長一尺幅六寸深六寸に作り底に鉄網を張り、また前後に方三寸五分の口を開き鉄網を張り以つて水の交換流通に便にす、底網上には豆粒許の砂礫を敷き、その上に卵子を撒布する、凡そ4、5百つぶ是を水槽に排列する、各数個箱の半身を浸すを以つて適度とす、後鉄網を換るに馬尾網を以つてす。

(図の説明)

- (1) 水槽配置図
- (2) 吸卵器ノ図
- (3) 孵化匣ノ図

以上原図から復写（著者）

(註1) この年琴似川と漁川で採卵のために捕獲した鱒は雌69尾、雄56尾で、採卵数は135,861粒、このうち5,000粒が東京官園に送られたもので、他はいづれも前号にふれた借楽園の孵化室に入れられた。

(註2) 開拓使附属船、黒田丸の改称、644屯、英国製。

(註3) この卵は前年12月にとられたもので、雌72尾、雄87尾、採卵数は6万余とある。全部借楽園に入れられ、約半数は死んだが、残余のものは発眼後東京官園に送られた。

但し、この卵数は「開拓使報告書」によれば29,000となつており、「事業報告書」では9,000となつている。